特集

福島はいま
ー連帯と協同からつくる未来

協同の発見誌では、東日本大震災以降、震災関連の特集をこれまで４回取り上げてきた。被災の問題を網羅的には取り扱えてはいないが、できるだけ多くの人たちにこの震災の問題に関与してもらいたいと被災の現状やサポートする側、される側の話、ワーカーズコープの取組み、原発事故問題などを積極的に取り扱ってきた。震災から２年３か月が経ち、徐々に問題や課題が整理され、被災地はもちろん、被災地以外の人たちにも問題が共有され始めたように思われる。

いちばん懸念される問題の一つは、人びと、地域の関係性の崩壊で、コミュニティがばらばらになり、大家族が核家族化し、散り散りになり、地域社会をつくり直していけるだろうかという課題である。住み慣れた地域に住みたいがコミュニティが崩壊し、仕事や生活が再建できるのかというジレンマの中で、先が見えない状況に置かれている。

もう一つの問題は、被災地、被災者が忘れ去られてきているという疎外感ではないだろうか。全国の人びとが気にかけて支援や応援をしてきた状況が、時間の経過と共にもとに戻りつつある。しかし実際には、生活を再建できた人はそう多くはない。どちらの問題も、先の見えない状況に置かれ、それが重苦しい不安と孤立感として被災者に覆いかぶさっている。

福島の抱える課題はこれらの問題に加えてさらに、人びとの分断が進んでいることにある。故郷を放射能汚染で追われた人たちにとって、今の生活が仮の暮らしなのか、もとの土地に戻れるのか、戻っても生活できるのかという厳しい判断が各自に迫られる。そして、「補償」にからむ人びとの妬み、嫉妬が追い打ちをかける。みんなが被害者であるのに、分断され、つらい気持ちに置かれている。だれも好きこのんで避難をしているわけではないのにだ。

今号では、現状の福島の苦しみと課題を当事者のみなさんに聞くことを通して、共に少しでも問題を引きうけられないかを問う内容にした。こうした困難のなかでも、誰も犠牲にならない社会をつくろう、正義を貫こうと連帯を呼び掛け闘う方々、「復興」から誰も取りこぼされないよう、孤立を防ぐためのつながりをつくってきた方々、被災者の生きがいをつくる方々、そうした人たちを具体的に支援する方々、極一部ではあるが、そうした“美しく、素敵な”人たちの奮闘をお伝えする。

自分はだれとつながり、なにができるのか？ 会員の皆さんと一緒に、まずは福島の現状を知ることから、福島に関わる次の行動へと連帯を強め、未来を紡ぎだしていきたいと考える。協同総研の社会連帯組織「福島つながろうプロジェクト」でも通年のイベント（ひまわり・和棉PJや朝市ボランティアなど）を企画している。関わりたいという意思のある方が自由に参加できるので、そちらへの参加も大歓迎です。お問合せください。（編集部）